

中国古代の交通と祭祀

—— 泰山の信仰 ——

藤 田 勝 久

1 はじめに

中国山東省の泰山（海拔1545m）は、古代から祭祀と信仰の対象であった。前漢時代の司馬遷（前145、135～前87ころ？）が著した『史記』封禪書には、『書経』舜典を引いて、伝説の舜という帝王が五嶽（泰山、衡山、華山、恒山、嵩高山）を巡ったといい、その一つが泰山であった。その後、泰山をふくめて五嶽を巡行した伝えはあるが、その実態は不明である。それを不老不死の神仙思想と関連して祭祀を実行したのは、秦の始皇帝が最初といわれる。また前漢時代の武帝も、泰山で封禪の儀式をおこなった。これは秦・漢時代の皇帝儀礼として、名山の信仰がみえた例である。

これに対して泰山の巡礼は、地方の山岳信仰から、泰山の神（東嶽大帝）、道教の碧霞元君を信仰する人々によって、今日にいたるまでつづいている。

ここでは世界の巡礼にかかわる問題として、中国古代の交通と祭祀を紹介し、とくに今日までの泰山の信仰を考える。

2 秦始皇帝と漢武帝の封禪

秦の始皇帝は、天下を統一したあと馳道を建設した。それは首都の咸陽^{かんよう}から、全国の各方面におよんだ。その交通手段を使って、始皇帝は天下を巡行し、また泰山で封禪の儀式をおこなった。皇帝の宿泊は、通過する郡県に準備させたが、戦国楚の雲夢や、趙の沙丘、齊、燕の地方では、戦国諸国の離宮・禁苑を利用したらしい。こうした巡行は、各地の物見であるとともに、軍事的なデモンストレーションとみなされている。

始皇帝の泰山封禪は、その真偽に異説があり、実状はよくわからない。『史記』封禪書には、異なる伝えを残している。

一は、始皇帝が皇帝となって3年目の28年（前219）に、東方を巡行して鄒の嶧山を祭って刻石を建てた。そのあと齊・魯の儒生と博士70人を召して泰山に向かったが、儒生をしりぞけ、泰山の頂上で刻石をした（泰山封禪）。これは儀礼を秘密にし、後世にその内容が伝わらなかった。

そのため二に、始皇帝が泰山に登ったとき、途中で暴風雨にあい、大樹の下で休んだという。また二世皇帝は、始皇帝のあとを追って巡行し、泰山でも刻石に追記したが、秦が滅んだとき「始皇帝は泰山に登ったが、暴風雨にあって封禪できなかった」という噂があった。

つぎに天子の封禪を、漢代に実施したのは武帝である。武帝は、始皇帝と同じように西方の祭祀を始め、東方の郡国に巡行して、泰山の頂上に石を運ばせたことがある。そして元封元年（前110）には、高山から泰山をへて海上を巡ったあと、泰山にもどって封禪の儀式をおこなった。『史記』封禪書では、このとき武帝がただ一人の人物と一緒に登って実施したが、その人物は1日で亡くなり、儀

礼の実態は不明という。

このような泰山の封禪は、儒家の観念では、天命を受けた天子が成功を天に告げる祭祀であった。しかし始皇帝と武帝の儀礼は、むしろ方士の影響をうけ、不死長生を願う呪術的な儀式であったといわれる。

司馬遷の父・司馬談は、この元封元年の封禪に参加できず、洛陽で息子に著述を託して憤死した。そのあと司馬遷は、武帝に随行して巡行し、祭祀に参加した。だから『史記』封禪書は、漢代までの泰山信仰や、司馬遷が見聞した様々な伝えが具体的に記されている。

その後、皇帝の泰山封禪は、唐代、北宋時代にも行われ、その遺跡は泰山やふもとの岱廟^{たいびょう}の史跡に残されている。

3 泰山と中国人の信仰

こうした皇帝の儀礼とは別に、泰山には古来からの信仰が伝えられている。泰山は、まず神仙が住む自然神としての信仰と、東方の生命を司る信仰があったという。それが後世に東嶽大帝という泰山の神となり、その神はいわば（地獄の裁判長）として公平に裁くことなどが期待された。

また北宋時代（1008年）に真宗が封禪したとき、発見された像を安置して創建された廟で碧霞元君が祭られ、明代にその信仰が盛んになったといわれる。そして毎年正月～4月には、人々が大挙して押し寄せ、眼病、子授けなどを願った。これが現代までひきつづき信仰の対象となっている。

このように山東省の泰山は、皇帝から庶民にいたるまで、様々な信仰と多くの史跡を残しているため、今日では「世界遺産・東嶽泰山」となっている。その史跡には、つぎのようなものがある。

ふもとの泰安市は、泰山下廟となる岱廟がある。廟の中庭には、二世皇帝の泰山刻石の一部が伝えられ、東嶽大帝も祭られている。

ここから一天門の登り口に向かう。中腹には、二天門（中天門）があり、ここから登山が始まる。登りはじめてすぐ「五大夫松」があり、始皇帝が休んだという伝説をもっている。頂上に近づくと南天門があり、さらに頂上への道となる。

頂上は玉皇頂とよばれ、その下に〔無字碑〕があり、漢武帝が石を運ばせ立てた碑という伝えがある。また〔摩崖碑〕は、唐の玄宗皇帝が開元14年（726）に封禪した時のものである。近くには、元代に修復された東嶽廟（泰山上廟）があり、碧霞宮は、北宋に創建され、今も参詣の人々が訪れる泰山の中心である。このほか明の万暦年間にできた孔子廟もある。

4 おわりに

泰山の信仰は古くから知られている。しかし、秦始皇帝や漢武帝が天子の封禪を行なうと、それは地方の信仰対象から、広く全国に知られる信仰の対象となった。その信仰は、皇帝の祭祀だけでなく、東嶽大帝（泰山の神）や碧霞元君の信仰が盛んになっている。今日、一般人が泰山に巡礼するのは、ただ名所観光のほかに、こうした信仰が大きな要因となっている。また華北には、各地の「東嶽廟」を祭ったり、お守りでも救われる信仰を伝えるといわれる。

近年、湖北省の古墓で発見された竹簡には、秦代に禹歩（一種のステップ）と共にする呪術の言葉を記していたが、そこに「泰山」が現れている（湖北省荆州市周梁玉橋遺址博物館編『関沮秦漢墓簡牘』中華書局、2001年）。これも、泰山の信仰が全国に広がる一つの形態を示唆するものであろう。

泰山の石段は、ふもとの紅門（一天門）から全部で7000段といわれる。ちなみに、これを香川県の

金刀比羅宮と比べてみると、象頭山^{そうず}中腹の本宮まで785段、奥社の^{いずたま}巖魂神社まで583段の計1368段であり、泰山中腹の中天門から登っても3倍ちかい高さである。泰山の石段は、幅や勾配もまちまちで、今も修復を重ねながら人々をむかえている。こうした登山は、聖地巡礼というよりも、金比羅参詣の姿に近いかもしれない。中国古代の交通と祭祀・信仰の問題は、今後とも考察を深めてゆく必要がある。

《参考文献》

- 1 小竹文夫・小竹武夫訳『史記』全8冊（ちくま学芸文庫、1995年）。
- 2 野口定男ほか訳『史記』中国古典文学大系（平凡社、1968年）。
以上、封禪書の翻訳をふくむ。
- 3 吉川幸次郎『漢の武帝』（岩波新書、1949年）。
- 4 金子修一『古代中国と皇帝祭祀』漢代の郊祀と宗廟と明堂及び封禪（汲古書院、2001年）。
- 5 鶴間和幸『秦の始皇帝－伝説と史実のはざま』（吉川弘文館、2001年）。
- 6 藤田勝久『司馬遷とその時代』（東京大学出版会、2001年）。
以上、秦始皇帝、漢武帝、司馬遷の旅行にかかわるもの。
- 7 シャヴァンヌ著、菊池章太訳『泰山－中国人の信仰』（勉誠出版、2001年）。
清朝末期（1907年）調査旅行の写真を収録する。
- 8 劉慧『泰山宗教研究』（文物出版社、1994年）。